



Data 2024-19

監督・脚本: アン・テジン

出演: リュ・ジョンヨル / ユ・ヘジン / キム・ソンチョル / チェ・ムソン / チョ・ソンハ / パク・ミヨンフン / アン・ウンジン / チョ・ユンソ

👁️👁️ みどころ

盲人を主人公にした映画はオードリー・ヘップバーン主演の『暗くなるまで待って』(67年)や『座頭市』シリーズなど数多い。他方、闇に生きる忍者を、夜行性で単独生活をするフクロウに例えた司馬遼太郎の小説『梟の城』は有名だが、『梟—フクロウ—』と題する本作は一体ナニ？

本作製作の契機は1645年の『朝鮮王朝実録』だが、本作の主人公として登場する盲目の天才鍼医・ギョンス(リュ・ジョンヨル)は一体どんな役割を？日・中・韓それぞれで作られた映画『見えない目撃者』は、本来、論理矛盾のタイトルが興味を引いたが、本作でギョンスが見たものとは？

1645年当時の国王の座を巡る、仁祖と世子の確執は、お隣の大国が明から清に王朝交代したことによってもたらされたものだ。さあ、王サマはどちら側につくの？そしてそんな時代を、ギョンスはどう生き抜くの？こりゃ面白い！こりゃ必見！

■□ 『梟の城』は知っているが、このタイトルは一体ナニ？ ■□

今ドキの若者で、梟という漢字を書ける人は100人に1人もいないだろう。それほど梟という漢字は難しく、馴染みのない漢字だ。もちろん、フクロウという鳥は誰でも知っているが、私が梟という漢字を使った文章を見たのは、今でも司馬遼太郎の小説『梟の城』(59年)を読んだ時だけだ。

新聞記者だった司馬遼太郎が作家となる契機となった同作は、豊臣秀吉の暗殺を狙う面白い“忍者小説”で、そのタイトルは、京の都で暗躍し闇に生きる忍者を、夜行性で単独生活をするフクロウに例えたものだった。その連載時の題名は『梟のいる都城』だったから、「こちらの方が作品内容の意味が通る」との指摘があったが、語呂が悪かったためか、

単行本刊行に際しては『梟の城』と改題されたそう。しかして、本作のタイトル『梟フクロウ』(英題は『THE NIGHT OWL』、原題は『올빼미』)とは一体何？

■□■時代は16代国王仁祖の時代。契機は“朝鮮王朝実録”■□■

本作の時代設定は1645年。舞台は、李王朝時代の朝鮮国だ。日本では1600年の関ヶ原の合戦と、1614～1615年の大阪冬の陣、夏の陣を終え、徳川幕府が開かれ、その第3代将軍家光の時代だ。太閤殿下こと豊臣秀吉が起こした文禄の役(1592年)、慶長の役(1597年)によって朝鮮半島は大きな被害を受けたが、明国の応援もあって秀吉軍は撤退した。しかし、1636年の丙子の乱で朝鮮国は、明国に代わって中国大陸に新たに登場した清国に破れたため、李王朝の第16代国王・仁祖(ユ・ヘジン)の息子、ソヒョン世子(キム・ソンチョル)を人質に供するという屈辱を受けることに。本作を鑑賞するについては、そんな歴史の基礎知識が不可欠だ。

他方、私は全く知らなかったが、本作のアン・テジン監督は史実に残された“怪奇の死”にまつわる歴史的な謎に、斬新なイマジネーションを加えて本作を作ったそう。その史実に残された“怪奇の死”にまつわる歴史的な謎とは、“朝鮮王朝実録”の1645年6月27日付で書かれている次の文章だ。すなわち、

世子は、帰国後間もなく病にかかり、命を落とした。

彼の全身は黒く変色し、目や耳、鼻、口から血を流した。

彼の顔は黒い布で半分だけ覆われており、側近たちは、彼の顔の変色の原因を特定できなかったが、彼は薬物中毒によって亡くなったかのように見えた。

中国の時代劇でも、韓国の時代劇でも、毎日少しずつ毒を飲ませることによって毒殺していくストーリーがよく登場する。ちなみに、今年1月から始まったNHK大河ドラマ『光る君へ』を見ていると、何と平安時代の宮廷においても、藤原氏の“ある一族”による天皇毒殺の陰謀が描かれていたから、日本でも毒殺は歴史ドラマの定番だったようだ。しかし、上記文章にみる病状(死相)によると、世子が摂取させられていた毒の量はかなり多かったようだ。世子に毒を飲ませたのは一体誰？父親である仁祖は、やっ和人質とされていた清国から戻ってきた我が子の死亡をさぞ嘆き悲しんだことだろう！そう思っていると、アレレ、アレレ・・・？

■□■主人公は盲目の天才鍼医！彼が内医院に入ると・・・？■□■

本作冒頭、盲目の鍼医ギョンス(リュ・ジョンヨル)が宮廷の内医院で働く男マンシク(パク・ミョンフン)の協力を得て内医院で働くことに成功するストーリーが描かれる。そして、盲目ながら、耳をはじめ、その他の五官感覚が研ぎ澄まされたギョンスの鍼技術は、たちまち世子を治療する御医のイ・ヒョンイク(チェ・ムソン)に認められることに。

そんなストーリーと並行して、本作冒頭で描かれるのは、清国の人質になっていたソヒョン世子と、その妻カン世子嬪(チョ・ユンソ)が8年ぶりに朝鮮国に戻ってくるストー

リーだ。ソヒョン世子の10歳になる一人息子は、顔も知らない両親と会えることを無邪気に喜んでいたが、16代国王の仁祖は、ソヒョン世子に付き添ってきた清国の男たちが尊大な態度を取ることに我慢ならぬらしい。しかし、それをモロに出せば、屈辱の丙子の乱の二の舞に・・・？

なるほど、なるほど。いつの時代でもそうだが、1645年当時の李王朝の内政と権力闘争はとりわけ大変そうだ。もともと、庶民は、見えないことが生き残る術。そう心得ているギョンスは、単なる“盲目の鍼医師”だから、憧れの内医院に入っても、そんな権力闘争は無関係！そう思っていたが、アレレ、アレレ・・・。

■□■座頭市は“全盲”。ギョンスは“昼盲症”！その違いは？■□■

近時の日本では、盲目のピアニスト辻井伸行が有名だが、かつての米国では盲目の黒人歌手レイ・チャールズが有名だった。また、日本のかつての映画界では、勝新演じるダークヒーロー“座頭市”が有名だった。彼ら3人は“全盲”だが、ギョンスは夜盲症ならぬ“昼盲症”だと聞いてビックリ！夜盲症は俗に鳥目とも言われ、暗いところで物が見えづらくなるが、“昼盲症”はその反対で、「明るい場所での視力が、暗い場所でのそれより低くなる症状のことをいう」そうだ。

鍼医の仕事が繊細な神経の集中を要求される仕事であることは明らかだが、それは全盲の方が有利なの？それとも昼盲症の方が有利なの？その微妙なところは私にはわからないが、本作では全編を通してそれをしっかり味わうことができるので、それに注目！

最近視力の低下した私は、2023年12月6日に観た『ほかげ』（23年）で、画面の暗さに往生したが、それは本作も同じ、いやそれ以上だ。このスクリーンの暗さは100%それを意図してのものだから素直に受け入れざるを得ないが、鑑賞するのにしんどいことは間違いないから、それはしっかり我慢したい。

■□■父（仁祖）vs 世子 vs 孫。そこに領相が絡むと？■□■

私は全50～60話で構成されている中国のTV時代劇が大好き。そのうちの1つが『大明皇妃—Empress of the Ming—』だ。これは、明の第3代皇帝・永楽帝と、その長男で太子の朱高熾、そして朱高熾の息子で、永楽帝の皇太孫たる朱瞻基という、3代にわたる王家朱家の壮大な歴史物語だ。もともと、歴史モノとはいえ、その主人公は若き朱瞻基で、朱瞻基と、朱家を仇と狙う美女・孫若微との恋をストーリーの軸としながら、激動する時代と、その中での権力闘争を描いた面白いTVドラマだった。

本作もそれと同じように、父の国王・仁祖、その世子で清国に人質に供されていたソヒョン、そして、ソヒョンの帰国によって、はじめて父親に会った10歳の孫、という3代の王家が登場するが、本作ではそこに領相（チョ・ソンハ）が絡んでくるから、それに注目！

さらに、李王朝による朝鮮国は順調に16代まで続いていたが、お隣の大国、中国では、明から清への王朝交代が起きようとしていたから、旧勢力の明に後ろ盾になってもらおうと考えている守旧派の仁祖と、新興勢力たる清の新しい制度を取り入れようとする改革派

のソヒョンとの考え方の相違は大きかった。そして、領相はソヒョンの改革を支持していたから、さあ、王家の対立は如何に？すると、“朝鮮王朝実録”に「世子は、帰国後間もなく病にかかり、命を落とした。」と書かれているのは、そんな政治対立が生んだ、父（仁祖）による息子（ソヒョン世子）殺し？まさか、まさか・・・。

■□■『見えない目撃者』は法廷モノ！本作では何を目撃？■□■

目の美しさを最大の“売り”にしていた女優、オードリー・ヘップバーンを“盲目のヒロイン”に設定した面白い映画が『暗くなるまで待って』（67年）だった。また、『見えない目撃者』という、それ自体が論理矛盾となるタイトルで面白い「法廷モノ」を作り上げたのが、韓国版の『ブラインド』（11年）、中国版の『我是証人』（15年）（『シネマ 37』190頁）、日本版の『見えない目撃者』（19年）（『シネマ 45』191頁）だった。これらでは、「見えない目撃者」の法廷での証言の価値が問われたが、さあ、その結果は？

本作でギョンスが果たす役割も、同作と同じような「見えない目撃者」だが、彼が「見たもの」とは一体ナニ？御医のイ・ヒョンイクによって天才鍼医として見出されたギョンスは今、清国から戻った後、なぜか体調がすぐれないばかりか、どんどん悪化していくソヒョン世子の鍼治療に精を出していたが、ある日そこでギョンスが見たものとは・・・？

■□■韓国で大ヒット！その理由は？■□■

『三国志』をはじめとする中国の時代劇も面白いが、韓国のそれも面白い。李王朝の歴代の王を主人公にした面白い韓国映画は、①暴君として知られた第10代王・燕山君と彼の目に留まった大道芸人たちの物語を描いた『王の男』（05年）（『シネマ 12』312頁）、②イ・ビョンホンが第15代王・光海君と彼の影武者の二役を演じ分けた『王になった男』（12年）（『シネマ 30』89頁）だが、本作は第16代王・仁祖の時代だ。彼は、極寒の中、徹底抗戦か降伏かで揺れる仁祖の前で高官たちが論戦を繰り広げる姿が印象的だった『天命の城』（17年）（『シネマ 42』257頁）にも登場していた。したがって、パンフレットの中にある、佐藤結氏（映画ライター）のレビュー「新鮮な仕掛けと俳優たちの好演によって完成した、見応えのあるスリラー」で詳しく解説されているように、「本作と合わせて見ると、清に対する仁祖とソヒョン世子の態度が、なぜ、ここまで違ってしまったのかがより深く理解できる」はずだ。

本作のチラシには、「韓国初登場 No.1 [年間最長 No.1 記録樹立!]」の文字が躍り、パンフレットでもその大ヒットぶりが解説されている。その理由は、上記レビューによれば、第1に、本作がコロナ後、安定して結果を出してきた“シリーズもの”でなかったこと、第2に、新人監督のアン・テジンが、時代劇に定評のあるイ・ジュンイク監督の大ヒット作『王の男』で助監督を務めた経験を生かし、王宮を舞台にしたスリラーを手堅く演出した手腕が高く評価されたこと、とされている。なるほど、なるほど。もっとも、第1の理由はすぐに理解できるが、第2の理由については、本作をじっくり鑑賞しなければわからない。したがって、それについては、あなた自身の目でしっかりと！

■□■ギョンスの行動力と仁祖のしぶとさにも注目！■□■

私が近時ハマっていた中国歴史 TV ドラマが『大秦帝国』だ。同作では、ラスト近くになって、当時の弱小国だった秦国の孝公こと嬴渠梁が全面的に信頼する改革のリーダーとして、“法治国家”への改革を断行していた衛鞅から“鼻そぎの刑”を受けた、嬴渠梁の異母兄である嬴虔が、“ある薬”を飲んで“仮死”する姿が描かれていた。

しかし、本作におけるソヒョン世子の死亡は“仮死”ではなく、客観的な事実だ。しかも、『朝鮮王朝実録』に書いてあるように、「世子の全身は黒く変色し、目や耳、鼻、口から血を流していた」から、その死因が毒であることは明らかだ。国王や世子に毒を飲ませる行為は、食べ物の世話をしている女官、もしくは担当医師でなければ不可能だから、昼盲症の鍼医ギョンスが目撃したその犯人は一体ダレ？それが明らかになった後、本作は予想もつかない怒涛の展開をしていくので、それに注目！とりわけ、ヤバイ現場を目撃したギョンスが、それを文書にしてカン世子嬪に託すストーリー以降は、サスペンス色が加速していくので、決して見逃さないように。

その展開の中で私が特に面白いと思ったのは、第1にギョンスの意外な行動力。普通、盲人は杖を頼りにゆっくり歩くことしかできないはずだが、本作に見るギョンスの行動力（逃げ足）は、『座頭市』シリーズにおける座頭市の行動力と同じように素晴らしいものだから、それに注目！第2は『大明皇妃—Empress of the Ming—』でも第3代皇帝・永楽帝（＝祖父）のしたたかさが目立っていたが、それと同じように、本作でも、仁祖が「これでアウト！」と何度も思われながらも、その都度しぶとくその危機を切り抜け、かなり長い間その権力を維持し続けるので、そのしぶとさにも注目！

2023（令和5）年2月21日記